王女Bがヒロイン座獲得のため設定潰します。

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王女Ｂがヒロイン座獲得のため設定潰します。

【Ｎコード】
Ｎ５７８４Ｘ

【作者名】
佐倉風弦

【あらすじ】
私の姉は、勇者に助けられる役割を担うヒロイン、姫の役割を持つ者です。それに対して私は、王女Ｂ。何もかもが姉に劣り、勇者の目にも留まらない《設定》なんです。
けど、そんなこと納得できません。《設定》ごときで役目を決められまさかセリフが「さらわれたお姉さまを助けてください」で終わるとかホントに嫌です。
だから、決意したのです。
姉からヒロインの座を奪ってやると！

プロローグ

……知ってますか？　よくあるＲＰＧのストーリーは魔王にさらわれた姫を勇者が助けて姫は勇者とラブラブになるんです。いいですよね、それ。勇者とラブラブになったら安心ですし……。ちなみに私の姉のレシャーナはその役割を持つ姫。そして私は……王女Ｂ。……何なんでしょうね、この格差は。

レシャーナって可愛い名前で、それに対して私の名前はマコ。全然王族っぽくありません。あとですね、容姿。レシャーナは輝く黄金色の長い髪に真っ白なドレス。顔は言うまでもなく美人です。私は……王族にはあまり見られない黒髪に短い髪。服は、戦士服。だってしょうがないじゃないですか。きれいなドレスなんて似合わないんですから。顔は普通。美人すぎるレシャーナとはひどい違いなんです。容姿、性格……全てにおいて私はレシャーナに劣る。

そういう―《設定》なんですから。要は、ヒロインになるレシャーナに私が勝っていてはいけないんです。ですから、何もかもレシャーナには勝てない。勝てることは、剣と魔法の腕ぐらいです。ここは、魔王にさらわれる姫は強くてはいけませんから。―《設定》なんです。

……何が《設定》ですか！？　《設定》ごときで格差をつけられてレシャーナより目立たないように、勇者の目に留まらないようにかふざんけんなって言いたいです！

私は、決意しました。

――――レシャーナからヒロインの座を奪ってやるのです。

まさか役目が「さらわれたお姉さまを助けてください」ってセリフ一つで終わっては納得がいきません。私自信の力で、《設定》を

ひっくり返してやるんです。

gem1

マレイア城は、私の父が治める城です。父はマレイア王国の国王で大きな権力を有しています。私は自室で窓越しに見える青と白のグラデーションを繰り広げる空を見つめていました。そのきれいな色は見ているだけで心を穏やかにしてくれます。

この世界では、誰もがシナリオ通りに動きます。勇者は魔王退治に向かい、魔王は世界征服を目論む。姫は魔王にさらわれる。《設定》に従って生きるんです。私に与えられた《設定》は姫の妹……さらわれた姉の身を心配する……。それだけです。完全に脇役です。でも、私はそんな脇役なんてごめんです。どうせなら、大きな役割を担いたい。何もかも姉、レシャーナに劣りますが、それでも……。

何が《設定》ですか！　私はそんなものに縛られてやるほど大人しくはありません。

レシャーナから、ヒロインの座を奪ってやります。

部屋を出ると、赤い絨毯が敷かれた廊下でした。長い廊下を歩いて、レシャーナの部屋の前で足を止めます。……《設定》なら今日のはずです。レシャーナが魔王にさらわれるのは……。レシャーナからヒロインの座を奪うということは、変わりにさらわれなければいけません。……ヒロインの座を奪うためとは言え、やはりそれはちょっと……とは思います。勇者に救出されるまでの間、魔物に囲まれて過ごさなければならないんですから。少し緊張しながらドアをノックします。

「はい、誰ですか？」

透き通ったような美しい声が聞こえてきます。その声だけで、ド

アの向こうにいるのがとんでもない美人だということが分かってしまいます。ちなみに私は、あんなきれいな声は出せません。

「姉様、私です」
「マコ？」

ドアが開き、レシャーナの姿が目に入る。もはや天然記念物並みの美しさをかもし出す人知を超えた美人です。黄金色の髪に白いドレス。ドレスなんか着ていなくても美しいことに変わりはないでしょう。私は、激しくこの姉に劣ります。

けれど、奪ってみせます！　……いや、魔王の変わりにレシャーナを奪うという意味ではなく……レシャーナからヒロインの座を。恐らく魔王はこの部屋に来るでしょう。魔王が来る前にレシャーナを隠しておく必要があります。もし、レシャーナと私が並んでいたなら魔王は確実にレシャーナを持っていくでしょう。そうならないために、レシャーナを隠す。一応、姉を庇ってさらわれたことになると思うんで、私の立場が悪くなることはないでしょう。

「今日ですよね……」
「……そうね」

レシャーナは暗い顔をします。そんな表情でも変わらず美しさを保っています。その美しさをちょっと私に分けてください。こんな顔をするということは、やっぱりさらわれるのは嫌なんでしょう。いくら勇者が助けてくれると言っても気分のいいものではありません。なら、好都合です。私は、豪華な赤色の椅子に腰掛けてレシャーナに問います。

「姉様、やっぱり恐いんですか？」
「大丈夫よ。それに……設定だから仕方ないもの」

「そうですか……」

私は、すぐに立ち上がりました。もはや椅子に座る必要もないほどすぐに。

「姉様」

「なに？」

「ていっ」

振り向いたレシャーナの頭を叩きました。強めに叩いたのでレシャーナは気を失って倒れました。レシャーナを引きずり、とりあえずベッドの下に詰め込みました。まあ、目が覚めたら自力で出て来られる場所です。

ふと、足音が聞こえました。振り向くと、後ろに立っていたのは黒い髪に紫色の瞳……そして、漆黒のローブ。その外見は少年のようですが……。

「あんたは……」

「俺？　魔王、かな」

「……」

どっと冷や汗が出ます。もしかしたら、今のを見られていたかもしれません。もし、見られていたならコイツはベッドの下のレシャーナを引きずり出して連れて行ってしまうでしょう。

「君が王女？」

「そ、そうです……」

……さっきのやりとりは、見られてなかったんでしょうか？　魔王は不思議そうにこちらをまじまじと見つめてきます。

「おかしいなぁ。王女ってもっと美人だった気がしたんだけど……気のせいかな？」
「あんた目、悪いんじゃないですか？　老化には気をつけた方がいいですよ」
「誰が老化だって？　言葉には気をつけなよ。殺されたいの？」
あれ？　魔王って姫にこんなセリフ吐かないと思うんですけど？
「まあ、いいや。とりあえず命が惜しかったらもう少しおしとやかにしておきなよ」
魔王がそう言った途端、意識が遠くなっていきました。

ｇｅｍｅ２

目を覚ますと、ベッドの上でした。そのベッドは真っ黒で豪華な雰囲気です。ここは、魔王城でしょうか？　周囲を見回すと悪趣味な置物が大量にありました。……とりあえず、レシャーナの変わりにさらわれることはできたようです。あの魔王もうまく騙されてくれたようで……。

「ちょろいですね」

思ったことを素直に口に出してしまいました。

「誰がちょろいって？」

振り向くと腕を組んで顔に怒りマークを浮かべる魔王がいました。声をかけられるまで全く気づきませんでしたから、恐らく気配を消していたのでしょう。どうやら今のセリフは聞かれてたみたいです。何がちょろいのか正直に説明してしまえば城に投げ返されて、レシャーナと交換されてしまう危険性があるので言いません。

「いや、何でもないです」

「……ふーん。ま、いいや」

そう言って魔王は、豪華な椅子に腰掛けます。それにしても、この魔王はとても魔王とは思えない容姿をしています。どう見ても、少年のようにしか見えません。魔王と呼ばれるほどの威厳も一切感じられず、あとこれは非常に失礼ですがそんなに強そうにも見えません。けど、魔王だというのなら見た目がどうであれ強いことに間違いはないのでしょう。

「そう言えば、あんたの名前は何て言うんですか？」
「魔王に向かってあんた？」
「じゃあ、どう言えって言うんですか？　魔王って呼べばいいんですか？　あ、いや、今から名前教えてもらうんですし、名前でいいですよね」
「まあ、いいけど。俺の名前は、シオード。で、君は？」
「私はマコです」
「……っっ！」

私の名前を聞いた途端、シオードは腹を抱えて俯きました。もしかして、お腹が痛いんでしょうか？　しかし、魔王が病気という《設定》はありえないと思います。魔王が病気だったら、勇者は何も苦労なんかしませんし……。

「ふふふ……何その名前。すごく笑えるんだけど」

お腹が痛かったわけじゃないようです。あろうことか、人の名前を聞いて笑うという失礼な……。

「王族でその名前って本気なの？　その辺に転がってそうじゃないか」
「……しょうがないじゃないですかっ！　名前は自分で決められないんですよ！」

確かに、その辺の村人とかにいそうな名前ですけど……そんなに笑うことないじゃないですか。私だって、レシャーナみたいな可愛くて素敵な名前が良かったですよ……。でも《設定》のせいで名前すらレシャーナに劣るような平民並みなんです。

「もう人の名前笑うとかひどいじゃないですかっ！　さっさとくたばれ！」
「くたばれ、ね。姫の言葉とは思えないよ。ちっ……他の国の姫にすればよかったな」
「舌打ちしないでください！」
「あ、忘れてた」

シオードは立ち上がると、引き出しから何かを取り出してこちらに戻ってきます。……あれは、首輪でしょうか？　犬につけるにしては、大きいですから下っ端のドラゴンに……いや、ドラゴンにつけるには小さそうです。

「これ、つける？　逃げないように」
「に、逃げないですよ！　逃げないからそれはやめてください！」

そんな物つけられたらいろいろ大事な物を失ってしまう気がするんで断固拒否です。ホントに勇者のところにお嫁に行けなくなりそうです。……この調子だと、勇者がここに来る頃に私はまだお嫁にいける状態なのか心配でなりません。

「嫌ならでかい口叩かないようにね」
「この……クソ魔王……」
「何か言った？」
「い、いえ、何も……」

本気で心配です……。

ｇｅｍｅ３

それにしても、私は……従来のＲＰＧがどういったものなのか知ってはいますが姫がさらわれている間何をしているかは知りません。姫が魔王城で何をしているか公開されているものなんてほとんどないでしょう。だからこそ、私も何をしたらいいのか分かりません。

とりあえず部屋のなかをウロウロしてます。

いや、もうホントに何したらいいのか分からないんです。何しましょう……？

外に出ることはできませんし、遊べそうなものは部屋にはありません。ひたすらウロウロしていると不意に扉が開きました。

私はびっくりしてそのままのポーズで固まります。

姿を現したのは金髪の髪を二つに結った可愛らしいメイドさんです。フリフリの可愛いデザインのメイド服はここが魔王城であることを忘れてしまいそうです。

彼女はシオードのメイドさんらしいムーラさんです。ムーラさんはにこりと微笑みます。

「おはようございます、マコ様。昨日はよく眠れしたか？」

「全く……」

「そうでございますか。ちゃんと眠らないとお身体を壊してしまいますよ？」

にこにこ笑顔が可愛らしいです。

何ですかこの人！？

脇役ですよね！？　モブキャラですよね！？

それなのに私より可愛くないですか！？

これって危機的状況じゃないですかぁっ！　姫が魔王の使用人に負けるとかあり得ないじゃないですか！

まあ、私は偽者なんで仕方ないんですけど。
いや、これ言っちゃうと自分でも傷付きます。
もしかして、このムーラさんはただの使用人ではなく四天王に一人とか？
それなら頷けます。
そういう重要な役割を持っているならこのように整った顔立ちでその辺の脇役より目立つように計らわれてるんでしょう。
そうです。そうに決まってます。
でも、危機的状況には変わりありません。
なぜか多分四天王確定のムーラさんが姫の私より可愛いんですよ？
周りから見ても明らかなはず。
あまり考えないようにしましょう。
考えてはいけないんです。

「マコ様？　大丈夫ですか？」

ムーラさんは心配そうに私の顔を覗き込んできます。
ここは魔王の砦だと言うのに、メイドさんはこんなに優しいなんて。
不安だった私の心を暖かく溶かしてくれそうです。
私もにこっと笑います。
こんな優しさを自分に向けられると自然に笑うことができます。

「大丈夫です」
「そうでございますか」

それにしても、魔王城といえばごつくて恐ろしい魔物が大量にいると思っていましたがそうでもないようです。

案外人間……いや、人間ではないのかもしれませんが、人型の何かがたくさんいるみたいです。
目の前のムーラさんだって魔王に仕えてるぐらいですから、普通の人間であるとは思えません。
魔人と人間は非常に区別が付きにくいと言いますし、魔人の可能性が高いと思います。

「では、行きましょうか？」

頷き、ムーラさんの後について行きます。
真っ黒な床を歩いていると何ともいえない気分になります。
何でしょうね？
どこか恐怖にも似た感情なんです。
床が黒いだけにそういう感情が生まれてしまうのかもしれません。

ムーラさんに案内されたのはシオードの部屋でした。
悪趣味な黒いベッドと置物、テーブルなんかが置かれています。
黒一色ですが、王宮なんかの赤一色とはまた違った豪華な部屋です。
畜生、私の部屋より広いじゃないですか。羨ましい……。

「畜生……滅んでください」
「誰が滅べって？　何？　君、本格的にいじめられたいの？」
「私はそんなマニアックな趣味じゃないですよ！」
「まあ、俺も後悔してるよ。こんな変な王女連れて来たなんてさ」
「あんたが寝てる時にナイフで刺していいですか？」
「べつにいいけど、それぐらいで俺は死なないし……ひどい仕返し

受けたくなかったらやめとくのをお勧めするよ」
私は首を傾げました。
「仕返しって何ですか？」
一応《設定》で魔王は姫を殺せないことになってるので殺されることはないと思います。
でも、だとしたらどういう？
「羞恥系で」
「私なんか食べてもおいしくないですよ……」
胸もないし、未発達なんです。きっと！
きっとこれから成長するんですよ。
決して、これで成熟体ということはないはずです。
かならずナイスバディになるはず。
そう決まっているんです。
「あ、何があっても勇者様のところにお嫁に行けなくなるようなことは……」
「今すぐお嫁に行けなくしてあげようか？」
「ブン殴っていいですか？」
「いいけど、覚悟しなよ？」
「やめときます」
ブン殴りたいのを堪えます。
ムーラさんは何でこの状況でにこにこ可愛らしい笑顔を浮かべているんですか？
この場の空気を和ませるためですか？　それとも面白がってるん

ですか？

「あ、そうだ。一つ教えてあげるよ」

「何ですか？」

シオードは一旦、口を閉じ、再度開きます。

「俺は設定をひっくり返すつもりなんだ」

「え？」

予想しなかった言葉に首を捻ります。

「魔王は勇者に倒される。この設定もね。負けるなんて嫌じゃないか」

「それは……」

つまり、シオードは勇者を返り討ちにするつもりでいるのです。

設定をひっくり返す。

これ自体は私と同じです。

目的が違うだけ。

ですが、シオードが勇者に勝ったりしたら私はどうなるんでしょうか？

こ、これは阻止しなければいけませんよね？

ｇｅｍｅ４

マコ様が魔王城に来て数日が立ちました。
私はメイドなのでお世話なんかを任されているのです。
今は用事も終わり、私は自室のベッドに腰掛けゲーム機の画面と真剣に向き合っていました。
何でゲーム機があるのかって？
この世界には何でもあるんです。
私が好きなのはエ●ゲです。
はい、画面に女の子がいます。服を脱ぎかけたそれはもうエロエロフィーバーです。
私の手にかかればどんなエ●ゲの女の子もたちまち落とされてしまうんです。素晴らしい才能だとは思いませんか？
もちろん私は、ＳＭプレイも束縛プレイも何から何まで熟知しているのです。
ゲーム画面から視線を話さずに私は思考を巡らせます。
マコ様が来てから数日が経過するのに何の進展もないんです。
なぜでしょうか！　あのシオード様のことだから手が早いと思っていたのですが、なかなか行動を起こしません。
さらわれたお姫様と言えばやっぱりアレじゃないですか！
×××とか×××とかされちゃったり、エロエロな展開が！
しかしシオード様は何もしません。
なぜですか！？
私はエ●ゲのような展開を期待しているというのに！
もしかして、《設定》のためやっぱり勇者以外は姫に手を出してはいけないんでしょうか？
しかしそんなもの、関係ありません！
二人が行動を起こさないなら私が何とか！
ゲーム機の電源を落としてベッドの下にしまうと部屋を出ます。

「シオード様」

私は笑顔を作りながら、テーブルに肘をついて本をパラパラ捲っているシオード様に声をかけます。

シオード様はこちらに視線を移します。

「何？」

「シオード様は、マコ様に手を出さないんですか？」

「あのガキに？　冗談じゃない」

不満そうな顔でシオード様は呟きます。

しかし、これで引く私ではありません。

「何なら、私がいろいろ伝授いたします」

「伝授？」

「はい。×××縛りから×××縛りまで幅広い束縛方法をお教えいたしますよ？　あのマコ様なら縛ってみたらきっと可愛いですよ？」

「いや、その知識はいらない」

「きゅう……」

シオード様もなかなか手強いです。

意外に難しいですね。どうやって説得しましょう。

「むー、何やってるんですか？」

「ままままマコ様！」

突然マコ様が部屋に入って来ました。
眠そうな目を擦っていることから、眠っていたんでしょうか？
そして声が聞こえて起きてしまったというところですね。
危ない危ない。うっかり今の話を聞かれてしまうところでした。

「ガキはさっさと寝てなよ」
「な、何ですかそれ！」

シオード様の言葉にマコ様が憤慨したようです。
きっと彼を睨みつけています。
しかしマコ様の可愛い眼光では残念ながら迫力は……。
シオード様の態度も私には分かります。
ツンデレです。シオード様は一見そんな感じはしませんが密かにツンデレなんです、あの方は。
対してマコ様もツンデレです。
そう、二人ともツンデレです。両方素直じゃない分、通常より衝突も激しいのです。
しかし二人共可愛さ満点です。
ツンデレダブルで喰らったら私はもう！
しかし！　なぜかエ●ゲ的展開が来ません！　早く来てください！
マコ様は防御も固いようでいつもズボンを履いてます。これではお約束のパンチラが発生しません。
何て勿体ないんでしょうか！　これだとズボンをずり下げるしかありません。
そうだ、スカートでも薦めてみてはどうでしょうか？
ついでにノーパンだったらもう眼福です。ノーパンミニスカとか萌え死にます！
今度薦めてみることにします。
てかシオード様はまだ手を出さないんですか！

手を出す前に勇者が来てしまったらどうするんですか！

「ガキなんだから眠いんだよね？　所詮ガキだから遅くまで起きてられないだろう？」

「うっく……眠くなんか……」

はい、マコ様は眠そうですね。

子守唄でも歌ってあげたいぐらいです。

と言うわけで子守唄歌っちゃいます。

「ね～む～れ～よ～～」

「ムーラ！？　それは、歌ったらダメじゃないか」

「うむむぅ」

この歌は魔法の一種です。

相手を眠らせてしまうのです。

五分もたたないうちに二人とも眠ってしまいました。

これで後は、二人を同じベッドに放り込んでおけばいいのです。

翌朝、私は再び部屋を訪ねました。

お二人ともぐっすり寄り添って寝ています。

「おはようございます、シオード様にマコ様」

笑顔で挨拶します。

「ん？」

二人共目を覚まして起き上がります。

「え？」

マコ様が顔を真っ赤にします。

「な、ななな何ですかコレーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」
「何で俺のベッドで君が寝てるんだガキ」
「知りませんよ！　何でアンタのベッドに！　な、何したんですかぁっ！　お嫁に行けなくなってたらどうしてくれるんですかぁ！？」

その場合はシオード様が責任取ってもらってしまえば良いのです。

ｇｅｍｅ５

私は王室で豪華な赤い椅子に腰掛けるお父様の前に立っている。
きれいな装飾が施された王室は、豪華な雰囲気がかもし出されている。
私は、本来魔王にさらわれるはずだった。
けど、そうはならなかった。
妹のマコが私の変わりにさらわれてしまった。
気を失って目を覚めた時にはマコの姿はなかった。
これは、もう《設定》の改変。
お父様が難しい表情で口を開く。

「マコもお前がさらわれると知っていて、見過ごすことはできんかったのだろう」
「そうね……」

《設定》のことは、皆知っている。
何が起こるのかも事前に分かっている。
私は、正直そのさらわれる王女の役割を恐いとも思っていた。
マコはそれを見通していたのかもしれない。
私も何かしなければ。
役に立たなければ。
マコのためにも。
けど、そんな簡単に思いつかない。

「陛下！」

扉が勢い良く開き、兵士の一人が息を切らしながら駆け込んでくる。

一体何が？

「勇者様がおいでになられました！」

早い。

まだ私は何をやればいいか、思いついてないっていうのに。

「すぐに通せ」

お父様が命令すると、兵士は敬礼してすぐに踵を返して駆けて行った。

どうしましょう。

私は何をすればいいのか。

そうしているうちに、勇者様が姿を現した。

金髪金目で整った顔立ち。どこか清い雰囲気の漂う勇者用の軽装。

誰よ！？　間違えてホストを連れて来たのは！

勇者とホスト間違えてどうすんの！？

役割が全く違うでしょうが！

「はじめまして、僕が勇者エルデンです」

あら？

勇者って言った？

勇者だったのね。でも、ホストでもやれば一日かなり稼げそう。

わ、私ったら何を！？

勇者様をホストだなんて失礼な！

今の考えは、ミスよ！　脳のミスなの。

それよりも、今の私にできることを――。

はっとした。

「ちょっと準備してくる！　勇者様、待ってて」

言い残し、私は王室を出て全速力で廊下を駆ける。
お父様が私の名前を呼んでるみたいだったけど、無視した。
廊下を歩いていた僧侶の前で立ち止まる。
これ！
ぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい！　それ貸して！」

私は僧侶の服を剥ぎ取り、杖も奪った。
僧侶は顔を真っ赤にして慌てる。

「レシャーナさまあああああああ！？　私の服ーーーーーーーー！」
「替えはあるでしょ！」

剥ぎ取った服と杖を持って近くの部屋に駆け込むとドレスを脱ぎ捨て、僧侶用の服と帽子を着用する。
そして、すぐさま王室を目指して駆けた。

王室の扉を勢い良く開け、大声で言う。
勇者様の耳に届くように。

「勇者様、私も連れてって！」
「レシャーナ、何を言っておるんだ」
「お父様は黙りなさい！」
「ぐふ」

お父様が落ち込んでるけど気にしない。
勇者様を真剣に見る。
勇者様は目を丸くして立ち尽くしている。
早く返事しなさいよ！
あ、もしかして私が役に立つかどうか分からないとか？

「私は回復魔法が使えるの。役に立つはずよ」
「では、お願いします」

返事が早かった。
役に立つと分かった途端にこれなのね。

「よろしくお願いします、レシャーナさん」
「早く！　早く出発をしましょう！」
「れ、レシャーナ……」
「お父様は黙りなさい！」
「ぐふ」

無事に連れてってもらえることになった。
それにしても、この僧侶用の服……ぶかぶかで胸が小さく見える！？
どうしてくれるの！？
あ、ダメね。贅沢言っちゃ。
マコはもっと不憫なんだから。
――――胸が。

「では、レシャーナさん。あなたのことはお守りしますので安心してください」

なかなかいい奴じゃない。

笑顔も太陽みたいで眩しい。

「お願いね」

「はい、あなたがスライムにボコボコにされた時は任せてください」

「待ちなさい！　ボコボコって既に事後じゃない！　しかもスライム限定！？」

とりあえず、スライム限定で守ってくれるみたい。

ｇｅｍｅ６

相変わらずお二人に進展の兆しは見えません。
どうしてこうも進展しないのでしょうか？
私は毎日フリフリのメイド服を着て、笑顔で愛想振り撒いてエ●ゲをプレイしながら心待ちにしているというのに。
エロ展開はまだですか！
ゲームをプレイするのもいいですが、やっぱり生で見てみたいじゃないですか！
人がエロエロやってるのを見るのは良くないことかもしれませんが、私の最大の栄養補給はそういったものをこの眼で見ることです。
もちろん、私が見ているのが分かったら本人達はやめてしまう可能性が極めて高いので気配を押し殺し、まるで空気の如く観察したいと思っています。
しかし、肝心のお二人は何もしません。
これでは意味がないじゃないですか！　一体何のために同じ城のなかにいるんですか！？
いえ、《設定》のためとは分かっていますが、私にとって男女が同じ場所に住むのはそういうエ●ゲ的展開を繰り広げるためだと信じています。
せっかくこの前、同じベッドで寝たと言うのに何もなかったのがいただけません。
私は簡単には折れません。
これから、またシオール様を説得に行こうと思います。

朝食の片付けを終えた私は、長い廊下を歩いてシオール様の部屋に向かいます。

黒い窓から見える空は、穢れを寄せ付けない清い空間を展開していました。
見ているだけで心が洗われるような気がします。
最も、私がエロを見たいという心は洗われませんが。
シオール様の前で立ち止り、軽くノックをするとゆっくりとできる限り音を立てないように扉を開けます。
なかに入ると丁寧に頭を下げて、部屋の端に立ちます。
黒で埋め尽くされた部屋の中央のテーブルで、シオール様はぼーっとした様子で読書に励んでいます。
そんなことしてる暇があったらマコ様のところに行ったらどうですか！？
キスして押し倒して×××とか！

「シオール様」
「何？」
「マコ様に×××とかしないのでしょうか」
「ムーラ、よくもそんな下品な言葉を」
「エロは正義です」

私は、笑顔で言いました。
シオード様はため息をつきました。

「早く行動に出ませんと。あ、そうだ。いっそ鞭とかどうですか？　良ければ、私のものをお貸し致しますよ？　もちろん、戦闘用ではなく×××用なので威力は低いから問題ないかと」

「とりあえず、君が何でそんな物を持ってるのか聞こうか」
「私もここに来る前はすごかったんですよ。×××女王様と異名をいただきました」
「そんな下品な異名がつくぐらいだから相当なんだろうね。それに

しても、何で鞭を？」
「私の見立てでは、シオール様は間違いなくSだと思いますので。マコ様は――間違いなくノーマルだと思いますけど」
「黙りなよ」

シオール様が顔を引きつらせます。
そんなにひどい会話なのでしょうか？
私には普通の話なんですが。

「では、拘束具でもお貸ししましょうか？　マコ様なら顔を真っ赤にしながら泣きますよ」
「うん、泣くだろうね。君の考えがひどくて嫌になるよ」
「そんなにマコ様のことを大事にお想いなんですね」

私がそう告げ、にこりと笑うとシオード様はピキッと顔に怒りマークらしきものを浮かべました。

「ムーラ、今日で君クビだから荷物慌てて出てけ」
「それは無理です。設定で私はここのメイドをやめることはできません」

こういう時は《設定》というのは便利です。
これにより、避けられることも多いので。
シオール様がお怒りのようなので次はマコ様を当たってみようと思います。

マコ様の部屋の扉をノックして扉を開きました。
なかでベッドに腰掛けていたマコ様が何か勘付いたのかこちらを見て、難しい表情をします。

「どうしましたか、マコ様？」
「あ、その、今日のムーラさんは何か雰囲気が違うような気がしたんで」
「あら」

いけませんわ、私ったら。
エロい考えを表したピンク色の華々しいオーラがだだ漏れになっていたようです。
隠しませんと。

「お隣よろしいでしょうか？」
「あ、いいですよ。座っちゃってください」

マコ様の隣に腰掛けます。
ふわふわのベッドは心地よいです。

「マコ様はシオード様のことがお好きなんですよね？」
「……っ！？　な、何を言ってんですか！？　そんなわけないじゃないですかぁっ！」

顔を真っ赤にしながら全力で否定しています。
流石、ツンデレ。
完全に否定しつつ可愛さ全開という恐ろしい状態。
思わず抱きしめるか、縛り上げるか、いじめるか、×××してあ

げたくなります。

「ですから、×××とかは」

「何言ってんですか！？　そ、そそそんなっ、そんなこと、できませんよ……」

マコ様は、顔を赤くしてキョロキョロどうでもいい所を見回したり挙動不審です。

可愛いですね、やはり。

そう言えば、

「ぺたマコ様」

「何てひどいあだ名なんですかっ！　人の悩みと名前を結合させるなんて」

お怒りになったマコ様が可愛い眼光で睨みつけてきます。

可愛いから恐くないんです。

ちなみに、ぺたマコはぺたんこ（胸が）とマコを合わせてみましたが不評なようです。

「そんなに、ぺたんこじゃないです！　B……いや、Cはあるはずです！」

ということなので、試しに握ってみます。

ぺたんこでそれは困難かと思われましたが、何とかできました。

「ふぐ……！？」

「ーAですね」

「ナイマス！？　せ、せめてAでいいじゃないですか！」

「ご安心ください。シオード様は巨乳より貧乳派ですから」

「あんな奴の好みなんか知らないですよ！」
「ぺたんこで大丈夫です」
「ぺたんこじゃないです！　脱いだら分かりますよ！」

脱いでくれるそうです。
マコ様は躊躇いもなく服を脱ぎ捨てました。
白い布で予想通りぺたんこの胸を巻いています。
白い肌が何だかつつきたくなってきます。

「ムーラ、俺でもこのぺたんこは流石にないよ。せめてBはいるね」

隣でシオード様が呟きました。

「え？」

マコ様は目を擦りながらシオード様を見て、次は自分の身体に視線を移します。
顔がゆでだこ状態です。

「……」

ポロポロ涙を流し始めました。

「うー……、姉様助けて。変態がぁ……」
「そのぺたんこの胸でまだ女ぶるとは往生際が悪いね」

さらに泣きます。
これ以上泣かせてどうするんですか、シオード様。
ここで泣き止ませるのが男の見せ所だと言うのに！
まあ、少し進展したの良しとしましょう。

これも、エロ展開への一歩です。

gem7

魔王城に来て数日がたっていました。
けど、あまり不自由はしていません。ムーラさんが作ってくれた美味しい食事をすることもできるし、本を読んだり城内をうろうろしたり大抵のことはできます。
魔王城に連れて来られたら、てっきり牢屋にでもブチ込まれるかと思ってたんで拍子抜けです。
いや、牢屋にブチ込まれたかったわけじゃないですよ？
今の状態の方がありがたいです。

城内には大きな書庫が存在しています。
ちょっと薄暗いですが、本棚がいくつも並んでいて様々な本があります。一生かかっても全て読みきることは難しそうです。
本棚に目を凝らします。
とりあえず面白そうな本を探しているんです。
適当に一冊、手に取ってみますが見たことのない文字で書かれていて読めません。決して私がバカなわけじゃないんですよ？
単にこの文字が解読の困難なものってだけなんです。
その本を戻して、再び本棚に目を凝らします。

「あ」

一冊だけ、薄っぺらい他の難しそうな本とは色も違うものがありました。
これなら読めるかもと思い、その本を抜き取りました。
表紙は女の人でした。
下着姿の女の人です。
下着のカタログかと思います。

女物なのは多分、ムーラさんが購入しようとしていたのだと思います。
何かいいやつがあるかもなので中身を開いてみます。
「……」
こ、これは下着のカタログではなかったです。
何かもうアレでした。
ふるふる震えが止まりません。
「あの魔王は、へんた」
「誰が変態だってこのガキ」
「ひえ！？」
背後から頭に一撃、強烈なのを喰らって、頭を抱えしゃがみ込みました。
見上げるとその場にいたのは、シオードです。
「その本は俺のじゃないから」
「アンタしかいないじゃないですか！」
「あのさ、俺がそんなの買うような奴に見える？」
「見えます見えます」
「黙らせてあげようか？」
「むぐぅ！」
ホントに黙らせられました。
口を塞がれて息ができません。
コイツ、やる気です。
私を殺してこの情報が漏れるのを防ぐつもりなんです。
と思ってたら、ぱっとシオードが口を塞ぐのをやめました。

「とにかく、俺のじゃないよ」
「じゃあ誰のだって言うんですか！」
今だ疑う私に対してシオールは呆れ顔で告げます。
「弟のだよ」
「弟？」
「うん。女好きでさ」
「弟がいたんですか」
女好きの弟ですか。
顔が見てみたいです。
コイツの弟とか一体どんな奴なのか一向に予想できません。
「ところで」
「な、何ですか？」
「俺、本当は気づいてたよ」
「え？」
いつになく真剣な表情で言うシオールに対して、意味が分からず首を傾げます。
一体何が？
気づいてたって？
目をぱちくりさせていると、シオールはさらに続けます。
「君が本物の王女じゃないってこと」
目を丸くして、次の瞬間叫びました。

「えええええ！？　き、気づいてたっていつから！」
「最初から」
「さ、最初……？」
「初めて会った時。さらう直前」

それは、つまり偽者だと分かっていてさらったと？
でも、それはおかしくないですか？
偽者だと分かっていたなら、なぜ本物を探さずそのままさらったんですか？
その疑問を解決するため質問します。

「確かめるためだよ」
「？」
「設定が変えられるものなのかを。結果、君をさらうことができた。それで設定は変えられることが分かったんだ。俺も勇者に倒されるとか嫌だし」
「勇者を倒すんですか？」

質問を投げかけると彼は、こちらを見てしばらく沈黙した後、珍しく笑顔を浮かべました。
喜んでる笑顔ではない気がしました。

「君はどっちに勝ってほしい？」
「それは……」

以前の私なら、間違いなく勇者に勝ってほしいと言ったはずです。
けど、今は分かりません。
少なくとも、シオールもひどい奴じゃないんです。
この魔王城に来てからひどいことは何もされませんでした。
閉じ込められることもなく、自由に生活できてます。

いわゆる放置状態なのかもしれませんが、ほんの少しでも優しさを感じずにはいられません。
もちろん、悪口を言われて腹が立つことは多かったんですが。
シオールが負けて、消えてしまってもいいとは思えないです。
でも勇者に負けろというのも。
せっかく探してくれてるわけで。

「ひ、引き分けとかでいいじゃないですか！」
「引き分け？」
「そうですよ。それなら、誰も消えずに済みます」
「君ってつくづく変な子だね」

そう言い、シオールは腹を抱えて笑います。
イラっときたので頭を叩きましたが効果はないようです。
何なんですかコイツは！
人が真剣に話してるっていうのに。
笑うのをやめてシオールは、次に苦笑いを浮かべます。
ここまで表情がコロコロ変わるのは今日が始めてです。

「引き分けは難しいかな。俺は、勇者には負けたくない」
「それは、やっぱり勝ちたいんですか？」
「まあ、単に勝ちたいってのもあるよ。それに」
「それに？」
「……何でもない」
「な、何なんですか！　理由を」

さらに聞こうとするとシオールは怒りました。あから

「何でもないって言っただろ！」
「……」

私は黙りました。
何かよっぽど聞かれたくない理由だったみたいです。
「……いや、怒鳴って悪かったよ」
「え？」
突然シオールの態度が変わり、謝ってきます。
いきなり何が？
「だから、泣かないでくれる？　厄介だから」
自分が泣いていたことに気づきました。
涙が頬をつたっていました。
急いで服の袖で拭きます。
まさか、私がコイツに怒鳴られたぐらいで泣くなんて信じられません！
何でこんなことに？
「し、失礼します！」
そう言って、書庫を出ました。
廊下に出るとムーラさんが立っていました。
「マコ様、大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ！　でも、私は泣き虫にでもなったんですかね……」
「違いますよ。新しいものです。きっといいことが起こります」
ムーラさんは、花のように愛らしい笑顔を浮かべてタオルを差し出してくれます。

新しいもの、とは何か分かりませんでした。

ｇｅｍｅ８

黒い枠の大きな窓の向こうに、まぶしいブルーの空が覗くなか、シオールの部屋のテーブルで本を読んでいました。
向かい側にはシオールが本をパラパラ捲っています。別に読んではいなさそうです。
何の会話もないまま黙々と本を読んでいると、不意に扉をノックする音が部屋に響き渡りました。
ゆっくりと扉が開き、オレンジジュースを乗せた銀のトレイを持ったムーラさんがやっぱり可愛らしい天使のような笑顔で入って来ました。

「こ、こんにちは」
「おはようございます、マコ様」

そう言えば、今は朝でした。
こんにちはっていつでも通用すると思いますし、大丈夫だとは……。
ムーラさんは丁寧な仕草でオレンジジュースをテーブルに置くと、ぺこりとお辞儀をします。
そして何か思い出したように口を開きます。

「あ、今日はシガル様が帰って来られるそうですよ」
「シガル？」
「シオード様の弟ですわ。シオード様とは正反対でとても愛想の良い方です」
「ムーラ、それは俺にケンカ売ってると見ていい？」
「ケンカなんて売ってません」
「あ、でも、シオードの弟って言うと、昨日言ってた……？」

不機嫌そうにテーブルに肘をついたシオードは黙って頷きました。
あのエロ本の持ち主ですか。
愛想が良いとは言っても、あんな趣味があるって考えると複雑です。
どうなんでしょうね？

「うん、あの本のね」

やっぱりそうだそうです。
そして、シオールはさして興味もなさそうにオレンジジュースのコップを持ちながら呟きます。

「あれは、髪が長くて巨乳で美人なのが好きだから」

……私とは正反対なタイプが好きだそうです。
何か複雑な気持ちですが、私は心配ないということらしいです。
別に、悲しくはないですよ。
そんななか、ムーラさんが笑顔で言い放ちます。

「そしてシオール様は、髪が短くて貧乳で可愛らしい子が好きなんですよね？」
「ムーラ、黙りなよ？」

可愛らしい意外の、髪が短くて貧乳なら私に当てはまっていますが。
兄弟なのに好きなタイプは正反対みたいですね。
シオールは、機嫌悪そうな表情で立ち上がると、ベッドに潜り込んでしまいます。
機嫌悪くなったらベッドに潜るのは魔王のやることですか？

何か違う気がします。
何と言うか、シオールは魔王なのにあんまりそんな感じがしないんです。
魔王らしさに欠けるというか、威厳がないというか……。
とりあえず寝るのを邪魔するわけにはいかないので、部屋を出ました。

相変わらず長い廊下を歩いていると、一冊の本が落ちていました。
落し物でしょうか？
黒いカバーのついた本のタイトルは――あ、これは私も好きな本です。
あんまり人気ないようだったんで、同じものを読んでる方がいて嬉しいです。
でも、誰が落としたんでしょうか？
ムーラさん、は本を落とすようなヘマはやらかしそうにないですね。いつも何十個もの食器を笑顔で運んでたりするぐらいだから。
とすると――。

「あ、そこの」

メイドの少女を引き連れた青年が声をかけてきました。
漆黒の髪を後ろで束ね、戦士用の軽装を着た長身。メイドの方は、きっちり切り揃えられた黒髪の美少女です。

「それ、その本。俺の」

彼は、本を指差して言います。
どうやら彼がこの本の持ち主らしいです。
本を差し出して、とりあえず笑ってみました。
同じ本を読んでる人がいるんです。これ以上に嬉しいことはないですよ。

「この本、私も好きです」
「え？」

彼は目をぱちくりさせています。
まあ、あんまり人気のない本なので珍しいのかも。

「マコさまー」

遠くからムーラさんの声が聞こえました。
というわけで、行きます。

「じゃあ、失礼します！」

ぺこりと頭を下げて、ムーラさんの声がした方へと向かいました。

「……まさか、俺と同じ趣味の女の子がいるとは」
「随分マニアックだね」
「男ならともかく、女の子がこれを」
「×××とかね。てか、カバー偽装って意味あるの？　中身見ちゃえば何の本か分かっちゃうじゃん。シオール様に怒られちゃうよ？」
「これを好きな女の子がいるなんて、運命なのか？」

何か話し声が聞こえてきましたが、よく聞こえませんでした。
まあ、私には関係ないないと思いますが。

ムーラさんによって再びシオールの部屋に連れて来られた私は椅子に腰掛けていました。
どうやらシオールの弟を紹介いてくれるっぽいです。
ベッドに腰掛けたシオールは、呆れたように呟く。

「わざわざ紹介する必要もないのにね」

一人ごとみたいなんで、返事はしません。
しかし、どんな人なんでしょうか？
やっぱり気になってしまいます。
そうしている内に、ノック音が響き扉が開きます。
笑顔のムーラさんが引き連れて来たのは、先ほどの青年とメイドさんでした。

「この方がシガル様です。で、そちらがメイドのリノですわ」
「あ、さっきの」

シガルさんも気づいたようです。
この方がシオールの弟？
今、とんでもない違和感を覚え中です。
シガルさんは、長身でシオールよりも背が高い……どう見てもシオールの方が弟に見えてしまいます。

「兄じゃ……？」
「俺が弟に見えるとか言いたいの？　まあ、別にそんなに怒らない

けど。後で縛り上げるからね」
「怒ってる！？」

危ないところです。
余計なことは言ってはいけませんね、やっぱり。
本人は弟より小さいことを気にしているんでしょう。

「ところでムーラ、この子は？」
「王女のマコ様です」
「王女か。なるほど」

と言っても偽者なんですけど、それは秘密なんです。
いや、一応王女であることに変わりはないんですけど。
シガルさんは確かめるように聞いてきます。

「さっき会ったのは、間違いないよな？」
「はい」
「じゃあ、これを」

手渡されたのは、男の人が用意したとは思えないピンク色でハート柄だらけの手紙でした。

ｇｅｍｅ９

シガルさんにもらった手紙を開けてみました。
なかには便箋が一枚……取り出そうとした瞬間にシオードに手紙を取られました。

「シオード、何するんですか！？」
「検閲だよ検閲」

便箋を取り出したシオードは、それに目を落とします。
わずか数秒でした。
なぜか便箋が赤い炎で燃え上がり、チリのようになってしまいます。

「な、何してるんですかぁっ！？」
「ごめん。ちょっとした手違いで」

手違いで燃やしちゃったんですか？
これじゃあ、手紙の内容が分からないじゃないですか！
てか何で燃えるんですか？　魔王なら流石に力の制御はできますよね？

「ま、いいんじゃない？　大した内容じゃなかったし」
「あ……兄貴、いくら何でも燃やすことは……」

シガルさんは、ふるふる震えながら言います。
自分の書いた手紙を燃やされて気分が悪くならないはずがありません。

「ま、まあ、いいよ。手紙意外でどうにかする」
「せっかく書いたのにねー。ボクが手伝ってあげたのに」

リノがにこにこ笑いながら言っています。
手伝うって、一体どういう手紙だったんでしょうか？
ますます気になります。
それにしても、見るところリノはシガルさんの専属メイドか何かなのでしょうか？

「あ、もうこんな時間か。じゃ、また！」

シガルさんは時計を見ると慌てて部屋を出て行きました。
何か用事でもあるみたいです。
リノもぺこりと頭を下げるとシガルさんの後を追って駆けて行きました。
開きっぱなしになっていた扉をムーラさんがゆっくりと閉めます。
彼女はシオールに向き直ります。

「なぜ、先程手紙を燃やされたんですか？」
「誤作動だよ」
「アンタは何の機械なんですか……」
「誰が機械だって？」
「な、何も言ってないです」

しかし手紙を燃やした人なんて初めてみました。
さらに自分宛てではなく、他人宛てのものを燃やすなんて……。
ついでに手の上で。
熱くないんですかね？
まあ、魔法を使った本人は熱くないんだと思います。
それにしても、手紙の内容が気になります。

シオードに聞こうにも、今、大した内容じゃなかったと言ってたし、詳しく教えてくれそうにはありません。

「あ」
「どうしました、マコ様？」
「いや、何でもないです」
「？」

シガルさんに直接聞けばいいんじゃないですか！
手紙をくれたのはあの人なんですし。
今度聞いてみることにします。
今日は多分無理でしょう。
何か用事があるみたいですし。

「ところで」
「何ですか？」
「君は勇者を見たことはある？」
「ないです」

《設定》で勇者が世界を救うことは知っていても会ったことはありません。
何せ、勇者が城を訪れるのは王女がさらわれた後だと決まってますから。
私は顔を上げ、シオードに質問します。

「シオードは会ったことあるんですか？」
「ないよ」
「ないんですか？　ま、まあそうですよね。魔王と勇者が会うのは最後だと思います」
「勇者様もきっとかっこいい方に違いありませんわ」

ムーラさんが花のように愛らしい笑顔で告げます。
勇者は、多分かっこいいと思います。
やっぱりかっこよくないとダメですよね！
シオードは椅子に腰掛けて、余裕ありげに呟きます。

「まあ、俺よりは下だろうけどね」

勇者より自分の方がかっこいいと言いたいんですかコイツは。
何て自信過剰な。

「自信があるっていいですね？」
「何が言いたいの？」
「私は、姉様みたいに可愛くないし……」

いつも気にしていました。
何もかも姉に劣る。
そして、ほんの少しでも姉に嫉妬してしまう自分を恥ずかしく思います。
自分の大事な姉に対してそんな感情を少しでも持っているのが。
シオードは、しばらくこちらを見て淡々と告げます。

「そこそこ可愛いと思うよ？」
「え？　な、何を……言ってるんですか……」

顔が熱くなってきました。
恐らく、私の顔は真っ赤に染まっているんだと思います。
何せ可愛いなんて言われたのは初めてで……。
うろたえる私に対し、シオードはさらに付け加えます。

「――顔はね」
「顔だけですかぁっ！」

つまり中身は可愛くないと言いたいわけです、コイツは。
いや、もう可愛いと思われるような態度は一切取ってないんですけど！　むしろ恨みを買うような態度は頻繁に取りましたけど！

「ま、胸の大きさも可愛いって言えるよね」
「何てこと言うんですかぁっ！」

流石に部屋を飛び出しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5784x/

王女Bがヒロイン座獲得のため設定潰します。

2011年10月28日23時47分発行